只見短歌会　十二月詠草

大塚栄一　指導

道の辺の零余子取りつつ確かめん一食分のポケットの重み　小倉キミ子

百姓に生き来し我は被災地の農地復興の知らせに和む　馬場　八智

児童等の横断するを待つ車の運転席に赤き羽根見ゆ　目黒　富子

老衰の父親逝けどこれ程は泣かずと事故死の飼猫埋める　新国由紀子

家角の道に通ずる外灯も赤から青に変へるを告げ来し　関谷登美子

初雪の消えざるまへに降り継ぎし師走の大雪老らも知らず　渡部ゆき子

透析の休みの夫は穏やかな日にシクラメン外に出しをり　古川　英子

夫の墓の草の中より出でし石仏の姿に似れば供ふる　五十嵐夏美

年の瀬の買ひ物の値は変らねど量少なきは世の情勢か　渡部ヨリ子

遠く来し次男に声の出でぬ夫握りたる手をながく離さず　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　一月例会

目黒十一　指導

湯もみ唄澄むや上州冬の月　吉児

寒中やいとど賑ふ花の域　礼

雪もよい石焼き藷の声遠し　邦男

香りなき室の花散る夕べかな　順子

青空にふるさとの雪憂いたり　信

教え子の面影深し鍋囲む　修一

雪山に千本杉の連立す　リウコ

屋根裏に音ガサゴソと雪の夜　一穂

寒波来る池の苔石青々と　都

熊野古道杖のひびきに照紅葉　敦子

寒波来る怒濤のごとく襲われし　洋子

初日の出ブーツすこしくきつめにて

美しき東京駅の小春かな

顔見世や同郷と言ふドライバー

エレベーター押し出され来て日記買う

鮨店の厚き湯呑みに年惜しむ

母に似し妻の漬けたる鰊漬け

漆黒の闇夜の光や冬三日月

早朝の工事車雪を山と積み

荷箱よりポインセチアの色覗く

飯鮨を漬け終わる夜の雪静か

行く年や日記に残る悔ゆる日も